



令和8年3月23日発行

発行者  
公益社団法人 新潟県植物防疫協会

〒951-8141  
新潟市中央区関新2丁目1番73号505

☎ 025 (233) 2839

FAX 025 (233) 8018

《主な内容》

- 令和7農薬年度水稻農薬の出荷動向…………… 1
- イネ紋枯病の発生生態…………… 2
- セイヨウナシ褐色斑点病のSDHI殺菌剤とQol殺菌剤に対する感受性… 3
- 令和7年度主要農作物病害虫の発生概況…………… 4
- 令和7年度農薬実証は成績の概要について…………… 5
- 令和7年度水稻病害虫事業及び病害虫発生予察調査事業の概要について… 6

# 令和7農薬年度 水稻農薬の出荷動向

令和7農薬年度（令和6年12月～令和7年11月）の全農新潟県本部出荷実績から防除面積を推定算出いたしました。

育苗箱施用剤も含めた本年度水稻農薬の延べ防除面積は水稻の作付面積が増加したこともあり、194,000haとなっており、前年に比べ約1,700ha増加しております。

## 1 いもち病防除剤の出荷実績（延べ面積）

本年度のいもち病防除面積は70,700haとなっております。

本田では昨年に引き続き「トップジン剤」が最も多く利用されておりました。続く剤が「ラブサイド剤」となっており、「ブラシン剤」から

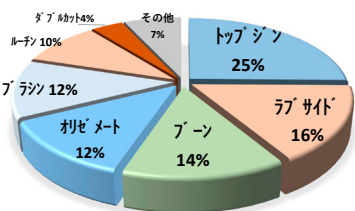


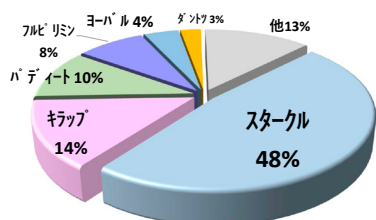
図1 令和7農薬年度 いもち病防除実績 (銘柄別)

また、育苗箱施用剤では「ブーン剤（有効成分ジクロロベンチアゾクス）」が「オリゼメート剤」を超える面積となっており、防除面積が10,000haに迫ってきております。

## 2 害虫防除剤の出荷実績（延べ面積）

本年度の害虫防除面積は155,600haとなっております。

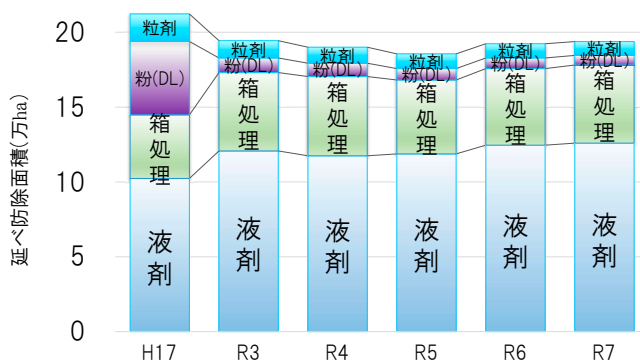
主食用米の作付面積の増加等により殺虫剤の延べ防除面積は前年に比べ約5,000ha増加しております。本田カメムシ防除場面は例年どおり「スタークル剤」を主力とした防除対応がとられておりますが、一部地区で「キラップ剤」への移行があったため、同剤の防除面積は前年に比べ約3,500ha増加いたしました。



\*フルピリン剤=リディア、エミリア  
図2 令和7農薬年度 害虫防除実績 (銘柄別)

## 3 剤型別の出荷動向（延べ面積）

本年の剤型別出荷実績は、液剤125,900ha、育苗箱施用剤52,100ha、粒剤9,200ha、粉剤（DL剤含む）6,400haとなっております。



\*R5年以前の値は一部推算を含む想定値

図3 剤型別防除面積推移

ドローンによる防除面積増加に伴う液剤への移行により液剤需要が増加したものの、本田の粒剤・粉剤（DL剤含む）の防除面積減少が大きくなっております。

特に、個人防除の主要剤型である粒剤による防除面積は、減少が続いており平成17年対比で約2分の1程度となっております。

## 4 おわりに

全国的なカメムシの多発生を受け、薬剤の増産対応をいただいたメーカーおよび出荷時期の調整をいただいた生産者・JAの皆様へ感謝申し上げます。JA全農は薬剤の供給を通じて、生産者の一助となるよう努めてまいります。

末尾ながら、今冬の大雪による被害を受けられた関係者の皆様方へ心よりお見舞い申し上げますとともに、高温下での防除や予察調査作業にあたっていただいた生産者、関係者の皆様に感謝を申し上げます。

(全農新潟県本部 肥料農薬総合課 遠田 直之)

# イネ紋枯病の発生生態

## 1 はじめに

紋枯病は、温暖化に伴い発生の増加が心配されている病害のひとつです。病害虫防除所の調査では、年次による増減はあるものの2004年以降の発生は緩やかな増加傾向となっています。

## 2 発生生態と発病推移

紋枯病は、前年の発病株で作られた菌核がほ場に残って伝染源となります。代掻きなどによって田面水に浮かんだ菌核が、移植されたイネの株元に付着します。発病および病勢進展には22～23℃以上の気温と相対湿度96%以上が必要とされ、県内では紋枯病の発病に適した温度となる7月上旬頃から発病がみられるようになります。発病初期には株元の葉鞘の一部に病斑が作られ、徐々に隣の茎に感染・発病



写真1 紋枯病の病斑  
(左: 初発病斑, 右: 初期病斑)

しながら、上位の葉鞘に進展します(写真1)。発病株の増加には降雨が影響し、2025年7月のように無降雨日が続くとう病株の増加は抑制されます。一方、病斑の上位への進展は降雨の影響をあまり受けません。また、上位葉鞘への進展は、7月中は比較的緩慢で、8月以降に進みます。これは、イネの葉鞘・葉身は抽出直後には紋枯病に対し抵抗的で、抽出後5～6週を過ぎると急速に抵抗力が低下することや、イネの草丈が伸び茎数も増えて株間の湿度が高まることによるものです。無防除の場合、収穫期まで発病株が増加するとともに、病斑が上位葉鞘に進展していきます。発病株の増加は、菌核から感染する場合と、発病した株に接触した葉を伝って隣の株に感染する場合があります(写真2)。ほ場内の発病株は、水面に浮いた菌核が吹き寄せられて、畦際で多くなる傾向があります。また、接触伝染があるため、条に沿って数株が連続して発病している場所が多く観察されます(図1)。



写真2 発病株に接触した葉身による健全株への感染

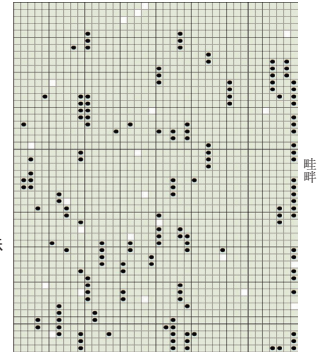


図1 ほ場内における紋枯病発病株の分布  
1マスが1株、●が発病株、白抜きは欠株

## 3 紋枯病による被害

紋枯病が発病した葉鞘では早期に葉身が枯れるため、イネの光合成能力が低下して、収量や品質が低下します。発病株における被害は、病斑が上位に進展するほど多くなります。「こしいぶき」では、草丈に対する病斑の高さの割合(病斑高率)が1%高くなると0.28%減収となりました。また、収量が減少するだけでなく、千粒重が小さくなり(図2)、良質粒や粒厚2.1mm以上の粒の割合が減少しました。

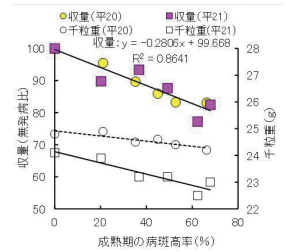


図2 「こしいぶき」における発病株の病斑高率と収量、千粒重

ほ場全体の被害は、発病株の被害程度とほ場内の発病株の割合で決まります。無防除ほ場における紋枯病の上位葉鞘への進展は、年次などによる変動が小さく、収穫期には止葉葉鞘まで進展します。これに対し、発病株の割合は年次やほ場による変動が大きく、ほ場全体の発病程度は主に発病株の多少により決まります。また、発病の増加がいもち病などに比べゆっくり進み、7月の発病株率で収穫期の発病株率を推定することが可能なため、発病状況を確認して防除の要否を判断することができます。

(作物研究センター 石川 浩司)

### 植防一口メモ

#### えだまめのダイズサヤマバエ防除について

ダイズサヤマバエは、今まで県内ではあまり問題にされなかった害虫ですが、令和6年産の新潟茶豆以降の作型で被害が多く、欠粒莢の発生により品質低下の一因となりました。暖冬年や夏期高温だと多発しやすいとされます。

幼虫によって幼莢内が食害されるため、莢の被害を受けた部分は生長が止まります。また羽化脱出時に、蛹の抜け殻を莢から半分出た形で残すことから、診断は容易です。

成虫は蚊に似ており、夕方から活動し始めるため、成虫を確認してからの防除対応は難しく、また被害を確認した後の防除対応では手遅れになります。

成虫の産卵が花卉枯死から莢長1.5cmの間に行われるため、開花期間が長い中晩生や晩生品種では産卵適期幅が長くなり、被害が多い傾向です。

薬剤防除適期は産卵に適した莢が多い開花終期～莢伸長期で、十分な散布量を確保して莢に薬液が付着するよう行う必要があります。(経営普及課農業革新支援担当 後藤 和義)

# セイヨウナシ褐色斑点病菌のSDHI殺菌剤とQoI殺菌剤に対する感受性

## 1 はじめに

令和6年度は西洋なし「ル レクチエ」にセイヨウナシ褐色斑点病が多発生し、出荷量が減少して大きな問題となりました。

病気が多発生した要因を検討する中で、セイヨウナシ褐色斑点病菌（以下、「褐色斑点病菌」という）のSDHI殺菌剤とQoI殺菌剤に対する感受性低下の可能性が指摘されました。そこで、これらの薬剤の防除効果を確認するため、園芸研究センターでは「培地検定」と「生物検定」の2種類の方法で褐色斑点病菌の薬剤感受性検定を実施したので、結果の概要を紹介します。

## 2 培地検定の結果の概要

培地検定では、各薬剤を含む培地において褐色斑点病菌の菌糸伸長量を比較しました。

菌株は、令和6年秋に県内7か所のほ場から採取した35菌株中、供試可能な34菌株と、平成19年度に県内1か所の現地ほ場から採取した2菌株を用いました。

また、薬剤はSDHI剤2剤、QoI剤1剤を用いました（表）。

表 供試薬剤

グループ名	薬剤名	備考
SDHI殺菌剤	ベンチオピラド水和剤 ピラジフルミド水和剤	
QoI殺菌剤	ピリベンカルブ水和剤	
ジチオカーバメート	チウラム水和剤	生物検定のみ

培地検定の結果を図1に示しました。この図は無処理区（農薬混和なし）の菌糸伸長量に対する、ベンチオピラド混和区の菌糸伸長量の比をグラフ化したものです。令和6年の採取菌株は、実用濃度に近い有効成分濃度100ppmでも菌糸が伸長する菌株が複数確認されました。一方、平成19年度に採取した2菌株では100ppmで菌糸伸長は認められませんでした。

ピラジフルミド水和剤、ピリベンカルブ水和剤についても、菌株によって違いはあるもののほぼ同様の結果が得られました。

## 3 生物検定の結果の概要

生物検定では、各薬剤を散布した「ル レクチエ」苗木の新梢葉に褐色斑点病菌を接種し、その新梢葉の発病程度から防除効果を評価しました。

菌株は、令和6年秋に県内7か所のほ場から採取した35菌株を用いました。

薬剤は培地検定と同じ薬剤を用いましたが、対照としてジチオカーバメート剤1剤を追加しました。

検定の結果を図2に示しました。この図は防除価別の菌株の割合を示したグラフです。防除価とは防除効果の高さを示す指標のことです。

2回の検定の結果、SDHI剤では約50～60%、QoI剤では約80～90%の菌株が防除価50未満となり、今回供試した菌株の中には、十分な防除効果が得られない菌株が多く認められました。

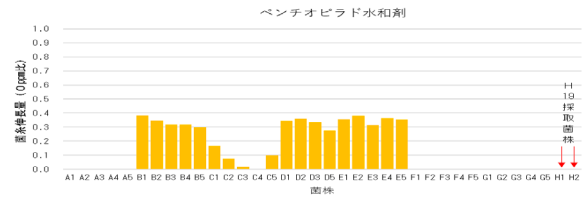


図1 有効成分濃度100ppmにおける菌糸伸長量

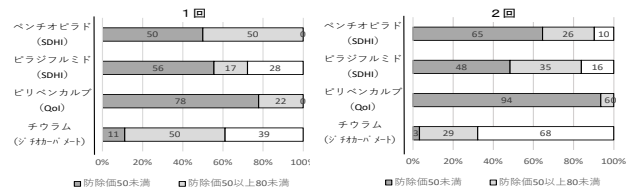


図2 防除価別の菌株の割合

## 4 考察

これらの結果から、今回、検定に供試したセイヨウナシ褐色斑点病の菌株の中にSDHI剤およびQoI剤に対して感受性の低い菌株の存在が確認されました。これらの薬剤は産地の防除暦で年間2～5回使用されており、継続的な使用が感受性低下を招いた可能性が考えられます。

## 5 おわりに

県内の産地全体で、今回のような感受性の低下した菌がどの程度分布しているかは不明ですが、感受性低下菌の発生を抑えるために、産地で殺菌剤の使用方法を見直す必要があると考えられます。しかし、セイヨウナシ褐色斑点病に登録のある殺菌剤は多くないため、既存薬剤の効果を長く維持する工夫が必要です。日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会が示す「野菜・果樹・茶におけるQoI剤及びSDHI剤使用ガイドライン」を参考に、耐性菌の発生しにくい環境づくりと適切な薬剤使用が求められます。

また、本病は多発すると薬剤防除が難しくなるため、落葉の収集・粉碎・すき込みなど、発生源となる病落葉の処理を徹底し、初期発生を抑えることが重要です。

（園芸研究センター 堀 清人）

## みちくさ

### 新潟県水稻農業の現状と課題

新潟県的水稻農業は、全国有数の作付面積と生産量を誇り、コシヒカリに代表される高品質米の産地として確固たる地位を築いてきました。信濃川・阿賀野川流域の肥沃な水田、雪解け水に支えられた豊富な水資源、昼夜の寒暖差といった自然条件が、良食味米の安定生産を可能にしています。一方で、人口減少に伴う米消費量の減少と米価の低迷により、農家所得は伸び悩んでおりましたが、近年の米価の高騰により生産者の収入は安定しましたが、農業従事者の高齢化や後継者不足が進み、地域によっては農地の維持そのものが課題となっている。さらに近年は、気候変動による高温障害や豪雨・水害、肥料・燃料価格の高騰など、経営リスクも増大しています。今後は、担い手への農地集積や法人化の推進、スマート農業による省力化・低コスト化、高温耐性品種や業務用・輸出向け米の導入を進め、環境変化に対応した持続可能な水稻農業の確立が求められています。  
（神山物産株式会社 佐藤 友紀）

# 令和7年度 主要農作物病害虫の発生概況

病害虫防除所では普通作物、園芸作物（果樹・野菜）の病害虫発生実態調査を行っています。令和7年度の主要病害虫及び特徴的な発生があった病害虫の発生概況を紹介します。

## 1 水稻の病害虫

### (1) いもち病

葉いもちの初確認は6月27日で平年比3日遅く、葉いもちの発生量は平年比やや少でした。穂いもちの初確認は7月29日で平年比6日早く、穂いもちの発生量は平年比やや少でした。

### (2) 紋枯病

初確認は7月4日で平年並でした。8月上旬以降、確認地点が増加しましたが発生量は平年並でした。

### (3) 斑点米カメムシ類

県内の主要加害種は、アカヒゲホソミドリカスミカメ（アカヒゲ）、アカスジカスミカメ（アカスジ）です。斑点米の発生と相関が認められる6月下旬～7月下旬の畦畔における確認虫数は、アカヒゲが平年並～やや少、アカスジが平年並～やや多でした。割削の発生率は平年並でした。

一部の地域でクモヘリカメムシ（クモヘリ）、ホソハリカメムシ（ホソハリ）の発生が確認され、確認虫数はクモヘリが平年並～多、ホソハリが平年比並～やや多でした。

7月10日注意報を發出し、注意喚起を行いました。農産物検査における斑点米による格落ち率は、平年よりも高くなりましたが、防除所調査の斑点米発生率は平年並でした。農産物検査による「部分カメ」にはくさび米が含まれていた可能性が高く、斑点米による格落ち率は検査値より低い可能性が考えられます。

### (4) その他の病害虫

育苗期の病害の発生量は、苗立枯細菌病が平年比少だった以外はいずれも平年比やや少～並でした。

ごま葉枯病は平年比12日遅い7月21日に初確認され、発生程度は少～中発生が多いが、中越、上越の一部で多発生ほ場もみられました。

稲こうじ病は各地で稀発生が確認され、発生量は平年比やや少でした。

墨黒穂病は8月22日に初確認され、8月下旬～9月上旬に中越地域で稀発生が確認されました。発生量は平年比やや少でした。

ツマグロヨコバイは払い落とし調査では平年比やや少でした。

ニカメイチュウの被害は、第1世代が平年比多、第2世代が平年並でした。

セジロウンカは、初確認が6月20日で平年比6日早く、飛来は広範囲に低密度であったとみられました。発生量は平年比やや少でした。

コブノメイガの佐渡市のフェロモントラップでの初誘殺は7月14日で平年比遅くなりました。県全体の発生量は平年並でした。

## 2 麦類の病害虫

赤かび病の発生は、調査までは8地点中2地点で稀発生を確認しました。発生量は平年並でした。

## 3 大豆の病害虫

葉焼病は8月上旬に1地点で少発生が確認され、その後発生地点が拡大しましたが発生程度は少発生でした。

ウコンノメイガは7月下旬に調査ほの一部で稀～少発生が確認されました。発生量は平年比少でした。

食葉性鱗翅目幼虫の発生量は平年並、吸実性カメムシ類の発生量は平年比多でした。

## 4 果樹の病害虫

### (1) なしの病害虫

黒斑病の発生量は平年比やや少でした。

黒星病は、発病葉は5月後半に新潟市で少発生を確認し、平年

比やや少でした。発病果は9月前半に新潟市で少発生を確認し、平年並でした。

セイヨウナシ褐色斑点病は新鞘葉では6月後半に新潟市で甚発生を確認しました。その後各地で発生が散見され、8月後半には多～甚発生ほ場が増加しました。多発生ほ場では早期落葉を確認しました。発生量は平年比多でした。

ナシヒメシンクイのフェロモントラップでの誘殺数は平年並～多でした。果実被害は平年並となりました。

### (2) ももの病害虫

せん孔細菌病は、5月前半に田上町で春型枝病斑発病枝が認められ、発病葉は5月後半に各地で少発生を確認、8月後半には新潟市で甚発生を確認しました。発生量は平年比少でした。

ナシヒメシンクイの新梢被害は7月前半に新潟市で確認されました。新梢被害の発生量は平年比やや少でした。

### (3) ぶどうの病害虫

べと病は7月後半に新潟市で確認され、その後も少発生を確認しました。発生時期が平年並、発生量は平年比少となりました。

さび病、黒とう病の発生量は平年並でした。晩腐病の発生量は平年並、灰色かび病の発生量は平年比やや少でした。

### (4) かきの病害虫

かきの円星落葉病は10月後半に新潟市で少発生を確認しました。発生量は平年比やや少でした。

### (5) 果樹カメムシ類

フェロモントラップでの累積誘殺数はカサガカメムシで平年並、チャバネアオカメムシで平年並～多、ツヤアオカメムシで平年並～やや多でした。被害果は6月後半に田上町のももで少発生、8月後半に新潟市のなしで少発生、9月前半に佐渡市のかきで少発生を確認しました。

## 5 野菜の病害虫

### (1) 冬春トマトの病害虫

灰色かび病は、葉の発病が4月上旬に新潟市で認められ、その後は発生量が増加し、6月下旬は平年比やや多となりました。果実発病は4月上旬に初確認され、その後は増加して6月上旬に平年比やや多となりました。全体の発生量は平年並となりました。

うどんこ病、葉かび病の発生量は平年比やや少。アザミウマ類の発生量は平年比やや少でした。

### (2) 夏秋きゅうりの病害虫

べと病の発生量は平年並、うどんこ病は平年並、褐斑病は平年比やや少でした。アザミウマ類の発生量は平年比やや少でした。

### (3) 秋冬ねぎの病害虫

べと病の発生量は平年並でした。ネギハモグリバエは6月上旬に新潟市で発生が認められました。最多発生の時期は10月上旬となり、発生量は平年比やや少でした。

シロイチモジヨトウはフェロモントラップへの誘殺数が6月、9月に平年比多で特に9月は平年を大きく上回りました。被害は6月下旬に村上市で初確認が見られました。9月8日、28日に速報を發出して注意喚起を行いました。被害の発生量は平年比やや多となりました。

### (4) 野菜害虫

ハスモンヨトウはフェロモントラップへの誘殺が5月下旬から認められました。誘殺数は6月中旬～8月中旬は平年並で推移し、8月下旬以降は増加して平年を上回る地点もありましたが、10月末までの総誘殺数は平年並～やや少なくなりました。被害の発生量は平年並でした。

オオタバコガは9月のフェロモントラップへの誘殺数は6地点全てで平年比多くなり、9月26日に速報を發出し、注意喚起を行いました。被害の発生量は平年並でした。

(病害虫防除所 平松 麻美)

# 令和7年度 農薬実証ほ成績の概要について

令和7年度「農薬実証ほ」では、殺虫・殺菌剤13剤及び除草剤17剤、計30剤（実証薬剤）を延べ40カ所で実証しました。防除効果及び被害の有無並びに作業性について、地域で使用されている薬剤と比較することで、実証薬剤の普及性を総合的に評価しました。令和7年12月15日に成績検討会を開催して実証薬剤の総合評価（普及性）が決定したので、その概要をお知らせします（表1～5）。

本年の「農薬実証ほ」において実証薬剤の普及性が評価されたことから、地域で問題となっている病害虫及び雑草の防除体系への組み込みが期待されます。近年現場での利用が増えているドローンによる実証結果も注目されます。また、実証薬剤は既存薬剤と作用機構の異なる成分もあり、難防除病害対策並びに薬剤抵抗性病害虫及び雑草対策としてもその活用が見込まれます。（県植物防疫協会 事務局）

表1 普通作物の殺虫・殺菌剤

薬剤名	作物名	病害虫名	作用機構分類		総合評価	備考
			殺虫(IRAC)	殺菌(FRAC)		
ブレードスタークルRゾル	水稲	いもち病、カメムシ類	4A	U14,16.1	A	いもち病は発生が見られなかった。ドローン散布
プロセーパーフロアブル	水稲	カメムシ類、ツマグロヨコバイ	9B		A	ドローン散布
プロフレアSC	大豆	ウコンノメイガ、ツメクサガ	30		A	ドローン散布

表2 野菜の殺虫・殺菌剤

薬剤名	作物名	病害虫名	作用機構分類		総合評価	備考
			殺虫(IRAC)	殺菌(FRAC)		
カナメフロアブル	ミニトマト	斑点病、褐色輪紋病		7	A、A	
フセキワイドフロアブル	ミニトマト	葉かび病、すすかび病		M07,53	A	
フセキワイドフロアブル	いちご	うどんこ病、炭疽病		M07,53	A	

表3 果樹の殺虫・殺菌剤

薬剤名	作物名	病害虫名	作用機構分類		総合評価	備考
			殺虫(IRAC)	殺菌(FRAC)		
テッパン液剤	いちじく	アザミウマ類	28		A、B	B評価は対照剤より効果は高いが発生果実率及び被害程度が高いことを考慮
ダイアジノンMC	かき	フジコナカイガラムシ	1B		B	B評価は実証区、対照区とも対象害虫の発生が見られなかったことを考慮
モスピランジェット	ぶどう	コナカイガラムシ類	4A		A	
エクシレルSE	ぶどう	アザミウマ類	28		A	
ペンコゼブ水和剤	なし	黒星病	UN	M03	B	B評価は対象病害の発生が極少であったことを考慮

表4 花きの殺虫・殺菌剤

薬剤名	作物名	病害虫名	作用機構分類		総合評価	備考
			殺虫(IRAC)	殺菌(FRAC)		
ファンタジスタ顆粒水和剤	ユリ	灰色かび病（葉枯病）		11	A、B	B評価は実証区、対照区とも対象病害の発生が見られなかったことを考慮
ダコニール1000	チューリップ	褐色斑点病		M05	A	

表4 普通作物の除草剤

薬剤名	作物名	処理方法等	作用機構分類 除草剤 (HRAC)	総合評価	備考
センメツZ200FG	水稲	一発処理	15、14、2	A、B	B評価は小程度の被害が認められたことを考慮。1箇所はドローン散布
センメツZジャンボ	水稲	一発処理	15、14、2	A、A	
カクシン楽粒	水稲	一発処理	15、15、27	A、A	1箇所は水口施用
カクシン1キロ粒剤	水稲	一発処理	15、15、27	A、A	1箇所はドローン散布
イッセン1キロ粒剤	水稲	一発処理	2、15、30	B	B評価は残草量多く、抑草期間短いが対照区より水掛かりが悪いことを考慮
イッセンジャンボ	水稲	一発処理	2、15、30	A、A	1箇所は初期剤施用
ラオウジャンボ	水稲	一発処理	0、15、27、2	A	初期剤施用
セイテンジャンボ	水稲	一発処理	30、5、27、2	A、A	2箇所とも初期剤施用
グッドラック500グラム粒剤	水稲	一発処理	33、2、27	A	ドローン散布
スタメン1キロ粒剤	水稲	体系処理（初期剤）	15	A	
先陣200FG	水稲	体系処理（初期剤）	5、14	A	
ツイゲキ1キロ粒剤	水稲	体系処理（中・後期剤）	5、2、27	A、A	1箇所はドローン散布
ラオウフロアブル	水稲（直播）	一発処理	0、15、27、2	A	初冬直播、ホバークラフト散布
イッセン豆つぶ250	水稲（直播）	一発処理	2、15、30	A	不耕起乾田V溝直播
モーティブ乳剤	だいず	土壌処理（一年生雑草）	15、3	A	主要雑草のマメアサガオに対する明確な抑草期間は認められなかった。
フルミオWDG	だいず	土壌処理（一年生広葉雑草）	14	A	主要雑草の帰化アサガオ類に対する抑草期間は15日程度。

表5 野菜の除草剤

薬剤名	作物名	処理方法等	作用機構分類 除草剤 (HRAC)	総合評価	備考
クリアター乳剤	えだまめ	土壌処理（一年生雑草）	15、3、5	B	B評価は対照剤とのイネ科雑草の残草量の差を考慮

総合評価 A：普及性が高い。B：普及性がある。C：普及性が劣る。D：判定不能。複数表示は、実証カ所毎に表示した。

作用機構分類（RACコード）は以下を参照する。

殺菌剤 FRACコード：https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/2021/mechanism\_frac.pdf

殺虫剤 IRACコード：https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/2020/mechanism\_irac02.pdf

除草剤 HRACコード：https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.htmより、除草剤 (HRAC) 2021年

# 令和7年度 水稻病害虫防除事業及び病害虫地域予察調査事業の概要

## 1 はじめに

NOSAI新潟では、無人航空機等による共同防除活動を通じて、新潟米の安定生産及び品質向上に取り組んでおります。

令和7年産水稻は、北陸農政局発表の作況単収指数は県全体で「102」、コシヒカリの1等米比率（新潟県農産物検査協会1月末現在）は75.2%となりました。また、主な病害虫の発生状況（病害虫防除所調査）は、発生量で葉いもち、穂いもちで平年比「やや少」、紋枯病、カメムシ類で平年比「並」となりました。

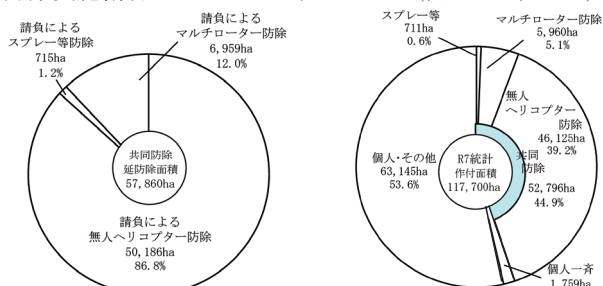
病害虫の発生は、いずれの地域でも大きな被害につながっていないことから、共同防除による一斉防除効果を十分に発揮することができたと考えており、関係する皆様のご尽力に感謝いたします。

## 2 水稻病害虫防除事業の概要

### 【実施概要】

NOSAIと防除協議会等が実施主体として行った水稻共同防除の延防除面積は57,860haで、昨年度に比べ1,024ha減少しました。減少理由として、マルチローターによる個人防除が増加したことが主要因として考えられます。

共同防除の延防除面積における方式別割合は、無人ヘリコプターが86.8%、マルチローターが12.0%、スプレー等が1.2%となり、令和7年産水稻統計作付面積に占める共同防除実施割合は44.9%となりました。（図1-1、図1-2）



（図1-1）共同防除の防除方式別割合 （図1-2）作付面積に対する防除方式割合（延防除面積）

### 【無人航空機防除の稼働実績及び安全対策】

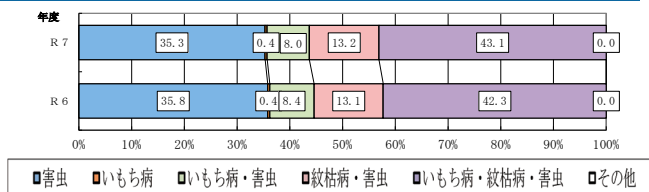
共同防除における無人ヘリコプターの延防除面積は50,186haで、昨年度に比べ2,039ha減少しましたが、マルチローターの延防除面積は6,959haとなり、昨年度に比べ1,082ha増加しました。

防除は7月中旬から始まり、8月上旬にピークを迎え、無人ヘリコプターの1日の最高稼働機体数は138機となりました。限られた期間に集中的に稼働するため、スケジュールが過密にならざるを得ない状況となっています。

また、本年度は、接触等の事故が5件発生しました。引き続き、円滑な事業実施のため、事故防止・安全対策を最重要課題とし、無人航空機防除に取り組む必要があります。

### 【防除対象別面積の割合】

防除対象別の延防除面積の割合は、いもち病・紋枯病・害虫の同時防除が43.1%、害虫のみの単独防除が35.3%、紋枯病・害虫の同時防除が13.2%の順となっています。また、防除対象に害虫を含む防除面積の割合は99.6%と高く、いもち病を含む割合は51.5%、紋枯病を含む割合は56.3%となりました。（図2）



（図2）防除対象別の延防除面積実施割合

## 3 水稻病害虫地域予察調査事業(病害虫発生予察調査)の概要【実施概要】

県全体の調査員数は1,013人（昨年度1,035人）となり、1市町村（地区）当たりの平均調査員数は16.9人（同17.3人）でした。そのうち農家調査員は22人減少して284人となりました。農家調査員の参画は、農家との情報共有や接点強化等の意義があり、調査員数の確保のみにとどまりませんので、今後も参画への積極的な働きかけを行ってまいります。

県全体での延調査地点は9,485地点（同10,322地点）で、60%に1地点の割合で調査地点が設置され、1市町村（地区）当たりの平均調査回数は5.4回となりました。（表1）

各市町村（地区）では、予察調査結果を分析し、病害虫の発生状況や防除要否、防除時期等の判定を行いました。また、情報提供の手段は、チラシの配布やホームページ等を活用し、調査結果等を伝達する取り組みを実施しています。

（表1）令和7年度水稻病害虫地域予察調査事業実績表

	病害虫地域予察調査員の設置状況		調査概要					1地点当たり面積 ha
	調査員数	左の内農業者	平均回数	平均地点数	延地点数	延調査員数	左の内農業者	
県計	1,013	284	5.4	28.6	9,485	4,374	1,121	60
1市町村平均	16.9	4.7	-	-	158.1	72.9	18.7	-
前年実績	1,035	306	5.6	30.3	10,322	4,556	1,207	57

## 4 おわりに

地球温暖化による異常気象や気候変動に伴う病害虫の生息域の変化など、病害虫防除を取り巻く環境は変化しています。今後も関係機関・団体等と連携し、地域住民の理解と協力のもと、地域の実情に合った防除が実施できるよう尽力いたします。

（NOSAI新潟 伊藤 創）

### 編集後記

- 連日盛り上がったミラノ・コルティナオリンピック、パラリンピックも終わり、日本は冬季五輪最高の24個のメダルを獲得するなど大活躍でした。その中でもフィギュアスケート女子、新潟市出身の中井亜美選手は初出場で見事、銅メダルを獲得。演技中の笑顔やチャーミングな姿が印象的でした。また、複数個所の骨折を負いながら奇跡的に出場し高難度の演技に挑戦した村上市出身の平野歩夢選手の姿には勇気を与えてもらいました。今年も農作業が本格的に始まりますが、異常気象という強敵に負けないよう頑張りましょう。
- 新潟県病害虫雑草防除指針の令和8年度版が近日、発行されます。1冊1,300円（税込み）で斡旋販売していますので是非ご利用ください。

（事務局）